



Title	第3章 アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験
Author(s)	新藤, こずえ
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 31, 42-61
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54989
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_31_04_13.pdf



第3章 アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験

新藤こずえ | 立正大学社会福祉学部講師

はじめに

本章では、アイヌの人々がアイヌであることについていかなる意識を有しているのか、その内実とアイデンティティ形成に影響を与えると考えられるアイヌ文化の経験について検討する。具体的には、アイヌであることの自己意識について、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の3群にわけ、それらの意識が過去・現在でどのように変容したか、あるいは変容しなかったのかを考察する。その際、世代によってアイデンティティに関わる経験が異なることをふまえ、年齢層ごとに分析を行う。また、アイヌ文化の経験がアイヌとしての意識に影響を与えるという見地から、アイヌ文化の経験の機会や内容についても分析を行う。さらに、アイヌの人々の組織化を促進する役割を担うアイヌ協会への関わりの現状から、アイヌ文化の普及・啓発その他アイヌ協会の取り組みが、アイヌの人々にどのように捉えられアイヌとしての意識にどのような影響をもたらしているのかを考察する。

なお、本調査の対象は伊達市に在住するアイヌの人々であるが、同じく農山漁村部にある新ひだか町で同様の調査を行った新藤（2013）と、札幌市およびむかわ町での調査結果を合わせて分析した小内・長田（2012）の研究を参照しながら、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験について検討する。

第1節 エスニック・アイデンティティの概要

第1項 アイヌであることに対する現在と過去の意識

インタビューを実施した47人について、各人のインタビュー結果全体にもとづいて、現在アイヌであることに対する意識を以下の観点から、3つの群に分類した。①「肯定的である」は、「アイヌであることに誇りを持っている」「アイヌの文化や伝統を継承したい」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「アイヌであることを隠したい」「アイヌであることに嫌悪感を持っている」「ネガティブなイメージがある」など、アイヌであることに否定的な人々が持っている意識である。③「どちらでもない」は、「アイヌであることに意識しない」「アイヌであることをあまり考えたことがない」という人々の意識である。なお、アイヌの養子となった和人（2人）や配偶者がアイヌである和人（9人）の場合もアイヌの人々と同様の観点から分析した。

全体の結果としては、伊達では、「どちらでもない」（83.0％）が大半を占め、次いで「肯定的である」が14.9％、「否定的である」が2.1％であった。「肯定的である」が、新ひだかでは49.1％、札幌・むかわでは40.2％、「どちらでもない」が新ひだかでは49.1％、札幌・むかわでは53.6％であったことと比べると、伊達では、アイヌであることに対して肯定的でも否定的でもない「どちらでもない」

意識を持つ者が多い（表３－１）。

表３－１ アイヌであることに対する現在の意識

単位：人、％

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
伊達	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
札幌・むかわ	45	40.2%	7	6.3%	60	53.6%	112	100.0%

年齢層別に見たものが表３－２である。「肯定的である」が最も多いのは老年層(27.8%)であるが、新ひだか(42.3%)と札幌・むかわ(58.5%)より少ない割合である。「肯定的である」は、壮年層(5.0%)、青年層(11.1%)いずれについても、新ひだか(壮年層42.3%、青年層33.3%)と札幌・むかわ(壮年層35.7%、青年層20.7%)よりも少ない。「否定的である」割合は、いずれの年齢層でも少なく、新ひだかや札幌・むかわとほぼ同様の傾向である。一方で、「どちらでもない」割合は、いずれの年齢層においても新ひだかや札幌・むかわよりも多い。

表３－２ アイヌであることに対する現在の意識

単位：人、％

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	1	11.1%	0	0.0%	8	88.9%	9	100.0%
壮年層	1	5.0%	1	5.0%	18	90.0%	20	100.0%
老年層	5	27.8%	0	0.0%	13	72.2%	18	100.0%
合計	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%

アイヌであることに対する過去と現在の意識は表３－３のとおりである。全年齢層を合わせた結果としては、現在「肯定的」である７人のうち、過去からそうであった者は４人であり、１人は「否定的」、２人は「どちらでもない」という者であった。現在「どちらでもない」者の中には、過去に「肯定的」であった者（5.1%）と「否定的」であった者（7.7%）が含まれているものの、全体的には、あまり意識の変化が見られない。このことから、第１に、伊達調査での対象者の大半を占める「どちらでもない」という意識の内実がいかなるものであるかを確認すること、第２に、少ないながらも過去から現在に至るまでに何らかの意識の変容があった者は、どのような経験をしてきたのかを見ていくことが重要である。次節以降では、このような観点から検討を行う。

表3-3 アイヌであることに対する過去と現在の意識

単位：人、%

	現 在								
	肯定的である			否定的である			どちらでもない		
青年層 (9人)	肯定的	0	1	肯定的	0	0	肯定的	0	8
	否定的	1 100.0%		否定的	0		否定的	0	
	どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	8 100.0%	
壮年層 (20人)	肯定的	0	1	肯定的	0	1	肯定的	0	18
	否定的	0		否定的	1 100.0%		否定的	3 16.7%	
	どちらでもない	1 100.0%		どちらでもない	0		どちらでもない	15 83.3%	
老年層 (18人)	肯定的	4 80.0%	5	肯定的	0	0	肯定的	2 15.4%	13
	否定的	0		否定的	0		否定的	0	
	どちらでもない	1 20.0%		どちらでもない	0		どちらでもない	11 84.6%	
合計 (47人)	肯定的	4 57.1%	7	肯定的	0	1	肯定的	2 5.1%	39
	否定的	1 14.3%		否定的	1 100.0%		否定的	3 7.7%	
	どちらでもない	2 28.6%		どちらでもない	0		どちらでもない	34 87.2%	

第2項 アイヌとしての意識の内実

(1) 青年層

青年層9人のうち、8人は現在「どちらでもない」意識を持っており、それらの人々は過去から「どちらでもない」意識を有していた。一方で現在、アイヌであることに「肯定的」である1人は過去には「否定的」な意識であった。つまり、過去から現在において意識の変化が見られない者がほとんどであるが、「否定的」から「肯定的」に変化した者もいる。その内実がいかなるものであるのか、具体的な語りを見ていく。

(過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者＝青年層・女性)

- ・ アイヌだというと、指差されて、汚い、感染る、寄るな、すごかったですね。もう臭いから寄るのかな、そういう汽車乗ってても、みんな白い目で見るといいたいな。顔でもうわかるみたいな、そんな感じですね。顔で判断される。
- ・ 何かいつも生まれたときから、お母さんに謝られてて、「アイヌとして生ま^マら^マせたことをごめんね」って、やっぱりそういうのもあったし、(アイヌ文化を)この子にはさせたくないっていう意識が強かったというのはわかってたんです。だから、私もアイヌとして生まれてきたけど、そういうことは忘れてっていう訳じゃないけど、普通の人間として、何て言うかな、一般人として生きていきたいなというのは思いましたね。すごくやっぱりトラウマがすごかったので、アイヌとしての。
- ・ (アイヌは自然や人を) すごい大事にするから(中略)そういうのはすごい、もう昔から素晴らしいなと思うし、自然を大事にして生きてると思う。そういうのは素晴らしいことだと思う。

このように、過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者は、子どもの頃にアイヌであることによっていじめを受けたり、母親からアイヌとして生んでしまったことを謝罪されたりという経験を通して、アイヌとしての自分に否定的な意識を持っていた。しかし、大人になり、アイヌの文化が自然や人を大切にすることを誇りに感じられる経験を通して、肯定的なアイデンティティを持つようになっていった。

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ 自分がアイヌとか和人とか、あまり考えたことが無いから何とも思わないけど、自分のことをアイヌだと思っている人が、日本国民にどう思われたいのか。同じ日本人だよと主張したいのか、それともアイヌ民族だと個別の種族という主張をしたいのかもわからないですね。(青年層・男性)
- ・ 中学校くらいの頃に、彫りが深い、毛深いなどの身体的な違いから何となくアイヌであることを自覚した(中略)結婚した時に夫の友人が夫に「アイヌ部落の人と結婚したら、そう思われるんだぞ」と言われたと聞いた。その時にアイヌ民族の1人であることを意識した。とくに気にはしなかった。(青年層・女性)
- ・ 俺の周り、あまり意識したことも無いけど、血の濃い人というのはですか、何かちょっと引け目みたいなものを持っているように見えたんですよ。(青年層・男性)

このように、過去も現在も「どちらでもない」者は、アイヌであるというアイデンティティについて「あまり考えたことがない」ために、肯定的にも否定的にも意識を持つことがなかったようである。「アイヌだと思っている人が、日本国民にどう思われたいのか(中略)わからない」(青年層・男性)と述べているが、自らがアイヌの血筋を引いていることと、アイヌ差別などを訴えている人々の活動は別の問題として捉えている。また、「どちらでもない」という意識を持ちながらも、アイヌの身体的特徴について、夫の友人にネガティブな捉え方をされても、特に気にしなかったと述べている。ネガティブな捉え方をする人物が夫であったなら否定的な意識をもつ可能性もあったと考えられる。アイヌとしての「血の濃さ」によって、引け目を感じることがあることも暗に語られているが、自らが「濃い」わけではないので、自らのアイデンティティには影響を及ぼさなかったと見られる。

(2) 壮年層

壮年層において現在、アイヌであることに「肯定的」である1人は過去には「どちらでもない」という意識から変化していた。一方で、現在「どちらでもない」18人のうち過去には「否定的」であった者が3人、もともと「どちらでもない」者は15人であった。現在も過去も「否定的」であった者が1人だった。

(過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者＝(壮年層・男性・和人))

- ・ (結婚した相手であるアイヌ女性の) おじいちゃんが教えてくれたんですよ。「お前はアイヌよりアイヌらしいな」、毛深いのを見て、「よその者には見えないな」って話しをしていて。(中

略)(自分は)毛深いことにコンプレックスを感じていたほどで、いいなと言われたことが初めてだったから。すごいな、立派な腕をしているなって。

このように、過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者は、かつてコンプレックスであった毛深さが、アイヌの配偶者となったことから、「アイヌよりアイヌらしい」と褒められ、アイヌとしてのアイデンティティを持つようになっていた。和人男性がアイヌ女性と結婚し、もともとの身体的特徴が「アイヌらしい」と受け入れられたことにより、アイヌとして前向きな意識を持つことにつながっていた。

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ (子どもの頃は)何か嫌な思い出しかないんですけれども(中略)父方のおじが、そういうの(アイヌであること)にすごく誇りを持っている人だったんで…。(壮年層・女性)
- ・ 私たちの小さい時代って、なんかこう「アイヌ」とかってバカにされた言葉を吐かれて嫌な思いをしたり(中略)(現在は)ただ普通に受け入れてますよね。(壮年層・女性)

(過去も現在も「否定的」である者＝(壮年層・女性))

- ・ 私たちは毛があるとかないとかで、ずいぶんいじめられてずっとやってきているのね。(中略)私たちがちょっと毛深いだけで、アイヌだとか言われること自体が、私にしたらとっても不愉快です。(中略)誇りだなんて思ったこともないし、普通に生まれてきたかった。

過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者は、子どもの頃にアイヌであることによって差別される経験をしていたが、その後、アイヌであることを誇りにしている親族との出会いを通して、否定的な意識を払拭している。あるいは、アイヌであることを普通に受け入れるようになったことから否定的な意識が薄まっていったと見られる。

一方、過去も現在も「否定的」な意識を持つ者は、子どもの頃のいじめられた経験だけでなく、身体的特徴のコンプレックスが現在でも消えることなく継続し、アイヌではなく「普通に生まれてきたかった」という意識が強い。

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ ただ自分が血を引いているんだな、というぐらいで。ただちょっと毛深いかないと、それだけはコンプレックスなんですけど。(壮年層・女性)
- ・ いじめまではいかないけれど、アイヌがどうのこうのとかって、私自身は無いのですが、からかわれている子を見たりというのはありました。(壮年層・女性)
- ・ 子ども心に自分がアイヌなのに他の人をアイヌっていうのでけなすっていうのはあつたりとかいじめとかあつたのかもしれないけど、でも私はそれを別に、だからどうしたっていう感じだからずっと。(壮年層・女性)
- ・ アイヌって恥ずかしいことなんだなって思ったね。(中略)バカにされるからですよ。(壮年層・男性)

壮年層の大多数を占める「どちらでもない」意識を持つ人々は、自分自身のアイヌとしての意識に肯定的にも否定的にも意識を持っていない者か、アイヌであることで差別的な取扱いをされている人を身近でみたことがありながらも、自分自身はその標的にはなっていない者かという者が含まれている。たとえば、「どちらでもない」意識をもつ人は、「毛深い」という身体的特徴にコンプレックスを持ちながらも、それがアイデンティティに決定的に否定的な意識を与えてはいない。また、「アイヌって恥ずかしいことなんだな」と認識させられる出来事を見聞きしているものの、自分に対して言われたり、経験したことではないので、自らの意識には否定的な影響を与えなかったのである。

(3) 老年層

老年層において現在、アイヌであることに「肯定的」である5人のうち過去から「肯定的」である者は4人、「どちらでもない」者が1人であった。一方で現在「どちらでもない」13人のうち、過去に「肯定的」であった者が2人、もともと「どちらでもない」者は13人であった。過去から現在に至るまで、アイヌであることに対して「否定的」である者はいなかった。まず、過去も現在も「肯定的」な意識の人々の語りに注目してみよう。

(過去も現在も「肯定的」である者)

- ・ なぜかスポーツ万能ですごく運動神経がいい。これはアイヌの血が混ざっているから、(アイヌではない他の) 同級生とは驚異的に違っていた。(中略) 若い時に音楽が好きになって、すごいよ、自分で言うのもなんだけど。これもアイヌの血を引いているせいかな、やっぱり普通の人とは違う。(老年層・男性)
- ・ お祖父さん、お祖母さんからやっぱり「お前たちはアイヌだよ」という話で、「自分たちはアイヌなんだ」っちゃう事だね。それをまた俺にも父親と母親が「お前もアイヌだよ」と。「お祖父さんからずっと繋がってるんだ」と。そういうあれでずっと来てるんだよね。(老年層・男性)
- ・ 学校にいったら差別もあったし。ずいぶん差別はつけられたねえ。アイヌだっちゃうことで。(父母に自分がアイヌかどうか尋ねると) うん、そうでないか聞いて。はっきり親たちに。うん、アイヌだよって。で、恥ずかしい？って聞かれたから、いや別になんか。(老年層・男性)
- ・ 自分は15、16才で(仕事に)入って(中略)よく思われないというわけではないけれど、話の分かる和人もいっぱいいたし、偏見を持っている人もいっぱいいたから。だから自分自身に誇りを持っていることだね。だって親に貰ったこの体、何文句があるのよ。[誇りというのは、親から貰った体という言い方をされましたが、先祖代々のという？] そうだね、血がそうさせるんだ。早い話が、遺伝子が違うから。アイヌ民族がどうなったかこうなったかは、自分で覚えておかなきゃだめなわけよ。(老年層・男性)

このように、過去も現在もアイヌであることについて「肯定的」な意識を持っている人々は、アイヌの人々の特別な才能(スポーツや音楽)があるとし、そのような才能に恵まれた自分自身について肯定的なアイデンティティを有している。また、先祖代々の血筋に誇りを持つように両親から聞かされた経験、学校では差別されたものの、両親からアイヌであることは恥ずかしいことではないと伝えられた経験も重要な意味を持っている。

(過去は「肯定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ うちアイヌの民族にしては豊かだったのですよ。本家の実家のそばでして、牧場とそれから農業と昆布浜も持っていて、人を使ってやっていて結構豊かだったので、人と付き合うのにも引け目も感じず自分を下げることなかったですね。(老年層・男性)
- ・ ウタリの女の子でも、私より血濃く出ている子でも、和人の立派な人たちと結婚していますよ。だから関係ないんだね。あまり自分を卑下することはない。なんも悪いことをしないで、一生懸命生きていたら関係ないのかなという感じです。(老年層・女性)

過去は「肯定的」であったが現在は「どちらでもない」意識をもつ人々は、地域内での階層が比較的高く子どもの頃から恵まれた生活を送っていたために、アイヌであることについて引け目を感じることはなかった者や、もともとアイヌであることについて誇りを持っていたけれども、さまざまな経験を通して、あえてアイヌであることや和人との差異を強調する必要がないと考えるようになったことがうかがえる。肯定的でなくなったという意味ではなく、意識しなくなったと捉えるほうが正確であろう。

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ 別にアイヌとか、あまり区別したことないし、そういうのはあまり。同じ日本人だからさ、そんなこと考えてないんだけど。(老年層・男性)
- ・ (子どもの頃は) 意外と仲よくしてたからな。たまに馬鹿にされて喧嘩したこともあるけれどほとんど仲よくしてたから。(中略)(この地域では) そんなにひどいアイヌの人なんていねえから。皆中間的だから。(中略) 混血が進んでたから。本当のアイヌの人ってほとんど、そんなにいなかったな。(老年層・男性)
- ・ アイヌはアイヌ同士の子どもが組んで、そして、和人の人たちが、アイヌそっち行け、こっち行けって、喧嘩したのをよく覚えています。(老年層・女性)
- ・ 子どもの頃、食べ物や着る物がなく貧しかった。粉をお店に持って行き、食べ物と交換してもらった。和人の家になりたいような、気を使うような感じで、もらい風呂をしに行った。(老年層・女性)
- ・ 友達にも、「お前アイヌのクセにいばるな」とかって言われたから、それで(自分がアイヌだと)わかって、親に「ひょっとしたらアイヌかい？」って言ったら、「ひょっとしてもしなくてもアイヌだよ」って。(老年層・女性)

全体の大半を占める、過去も現在も「どちらでもない」人々の意識は、もともとアイヌと和人を区別したことがない者、子どもの頃は、和人とアイヌで喧嘩した経験がありながらも、アイヌであることについてのアイデンティティにはさほど影響を与えなかった者、アイヌと和人の混血が進んでいたために、「ひどい」「本当の」と形容される「純粋なアイヌ」ではない自分にはあまり関係がなかったと捉える者などさまざまである。しかし、「どちらでもない」という意識がありながらも、「アイヌであることは本心では思っているけれど、絶対に口には出さない」(老年層・女性)や、「学校時代は毛深いので水泳や身体検査が嫌だった。水泳の授業は先生に『先生、おれ毛深いから嫌だ』

と正直に言って、授業に出なかった」(老年層・男性)、「言う人はやっぱし、アイヌ、アイヌって言うてた人はいるよ。私らも陰では言われていたと思うよ。だけど、実際向かって言われたことはない。陰では言ってるだろうけど」(老年層・女性) というエピソードも語られた。概してネガティブなエピソードであるが、その経験ゆえにアイヌであることに對して否定的な意識を持つにはいたっていないという。だが、それはネガティブな経験を極力回避することで、否定的な意識を持たないようにしたためかもしれない。

第2節 アイヌ文化の経験

第1項 アイヌ文化の経験の概要

前節では、過去と現在におけるアイヌとしての意識について検討を行った。これまでに実施された札幌・むかわおよび新ひだかの調査では、アイヌとしての意識の形成・変容過程について、「アイヌ文化活動に参加したり、アイヌ関係団体に積極的に関与したりする機会があったかどうか」(札幌・むかわ調査)(小内・長田 2012) が、エスニック・アイデンティティに影響を与えることが示唆されており、新ひだかにおいても同様の傾向が明らかになっている(新藤 2013)。本節では、アイヌ文化の経験とアイヌとしての自己意識の関連について検討していく。まず、実践しているアイヌ文化の有無について、現在、実践している文化がある者は伊達で36.2%であり、新ひだかの47.4%、札幌・むかわの66.1%よりも少なくなっている(表3-4)。年齢層別にみると、伊達では、文化を実践している者の割合は、老年層(72.2%)、壮年層(15.0%)、青年層(11.1%)の順で多かった(表3-5)。これは札幌・むかわ(老年層75.6%、壮年層69.0%、青年層48.3%)と同じ順であるが、いずれの年齢層においてもアイヌ文化を実践している者の割合が札幌・むかわよりも少ない。一方で、新ひだかでは、老年層(59.1%)、壮年層(30.8%)、青年層(66.7%)であり、老年層において伊達は新ひだかよりも多くなっている。

表3-4 アイヌ文化の実践(地域別) 単位:人、%

地域	実践している文化				今後実践したい文化			
	あり		なし		あり		なし	
伊達	17	36.2%	30	63.8%	23	48.94%	24	51.1%
新ひだか	27	47.4%	30	52.6%	38	66.70%	19	33.3%
札幌・むかわ	74	66.1%	38	33.9%	97	86.60%	15	13.4%

表3-5 アイヌ文化の実践(世代別) 単位:人、%

世代	実践している文化				今後実践したい文化			
	あり		なし		あり		なし	
青年層	1	11.1%	8	88.9%	5	55.6%	4	44.4%
壮年層	3	15.0%	17	85.0%	10	50.0%	10	50.0%
老年層	13	72.2%	5	27.8%	7	38.9%	11	61.1%
合計	17	36.2%	30	63.8%	22	46.8%	25	53.2%

実践しているアイヌ文化の内容は、青年層では「カムイノミの手伝い」、壮年層では「チセづくり」「イチャルパ」であり、壮年層は、アイヌ協会の研修として実施されている編み物、刺繍、ムックリ、トンコリ、木彫りが中心であり、その他は、イチャルパ、アイヌ語、民族衣装などであった。以下では、子どもの頃に経験したアイヌ文化と現在実践しているアイヌ文化について、その内容を見ていく。現在実践しているアイヌ文化については、日常生活に組み込まれているものと、アイヌ協会の研究会等への参加により体験しているものについて考察する。

第2項 子どもの頃に体験したアイヌ文化

アイヌ文化の経験はその年齢層ごとに異なるため、以下では、年齢層ごとに、子どもの頃に体験したアイヌ文化を見ていく。まず、青年層におけるアイヌ文化は、まったく関わったことがないか、博物館やカルチャーセンターで見聞きするものになっている。

- ・ [知っているアイヌ文化はありますか?] 刺繍。[アイヌ文様の刺繍ですね。どこで知ったのですか?] 博物館に行った時に。(青年層・男性)
- ・ カルチャーセンターって伊達にあるんですけど、そこで口でやるピョンピョンみたいな。[社会見学みたいな感じで、小学校のときに行ったという?] はい、それぐらいですかね。(青年層・女性)
- ・ イナウって何ですか? (青年層・男性)

一方で、「クマもらってきて、肉食べたり、そういうことはありました」(青年層・女性) という経験も語られたが、この女性の父親が「アイヌ(文化) 伝承者」となって活動していることから得られた体験であり、他の青年層には日常生活の中の経験として語られたアイヌ文化はなかった。この女性の現在のアイヌ文化への関わりは次項で詳しく述べる。

次に、壮年層におけるアイヌ文化の経験は、観光施設で実施されたものを見聞きしたケースと、自分の家族や親戚との関わりから得たケースに分けられる。観光施設で見聞きしたアイヌ文化が唯一の経験である場合は、青年層の大半と同様に、日常生活の中の経験としてのアイヌ文化は語られない。

- ・ 昭和新山のあたりにある資料館に行ったことがあるくらい。親族の冠婚葬祭もアイヌ式ではない。カムイノミも見ることがない。(壮年層・女性)

自分の父母あるいは祖父母世代との関わりから経験したアイヌ文化は、入れ墨、アイヌ語、宝物などがあり、自分が直接見聞きしたもののほか、親から「聞いたことがある」あるいは「近所に入れ墨の人が住んでいたような気がする」(壮年層・女性) といったものであった。入れ墨があったという語りは祖母世代までであり、壮年層の親世代ではなくなっていたと見られる。

- ・ ばあさんのほうは(中略)ここに結婚したという入れ墨が入ってた。(壮年層・男性)
- ・ おばあちゃんがまだその時元気で、アイヌの言葉っていうのに興味を持って教えて貰って…。

(壮年層・女性)

- ・ おやじが昔、知り合いに金を貸していて、その肩代わりに、「アイヌの宝物だ」と言って何か、まあ言ってみればお酒を注ぐヒツギみたいなもの、それをもらったことがあるというのは聞いたことがありますね。(壮年層・男性)

老年層においても、入れ墨、アイヌ語を見聞きした経験は多くの人々に語られたが、壮年層と異なるのは、親世代がアイヌ語を話していた、自分自身が子どもの頃アイヌ語を日常会話で使っていた、ほとんどアイヌ語で話す高齢者がいたという語りが見られることである。

- ・ 両親はどこかのおばあちゃんと話す時にアイヌ語を使っていた。(老年層・女性)
- ・ 子どもの頃、アイヌ語を片言で日常会話に使っていた。(老年層・男性)
- ・ (近所のアイヌのおばあさんは) 日本の言葉も言ってたけど、ほとんどアイヌ語。(老年層・男性)

また、自宅での儀式の経験、そのための囲炉裏、刀、イナウ、ヌササンなどが自宅にある中で生活しており、「日常的な祈りあった」(老年層・女性) ことや熊送りも記憶されている。さらに、道内のアイヌの人々が多く住んでいた地域から伊達に移り住んだ人々の中には、もともと住んでいた地域では土葬が行われていたことも語られた。

- ・ 私の母方のおじいちゃんが父親の跡を継いで酋長の仕事をしていましたね。いろいろな儀式をほとんど自宅でやっていましたね。(中略) いろいろな儀式がある時はカムイノミをするとかという長老たちが集まって、囲炉裏端でいろいろな儀式をやっていましたね。(老年層・女性)
- ・ お盆と正月にイチャラ^マブ^マってあるでしょ、そこで食べるのを楽しみに、寒くても雪の上に座って、エカシの拝むのを見て、ずっとお座りしてました。(老年層・女性)
- ・ 熊の赤ちゃんをとってきて、うちの母が育てていたと言っていたね。それで赤ちゃんを育てて熊祭^マりに使ったって。(老年層・女性)
- ・ 私の弟方が死んだときは、みんなアイヌブリで土葬でした。箱にも何にも入れないで。アイヌのゴザ、あるでしょ。あれにくるんで、ただ土葬にしたのを何回も見てます(中略) ジジ、ババ死んだ時も行って土葬にしたし。とにかく、土葬がダメだっていうまで、アイヌの人方は、土葬でやってました。(老年層・女性)

その他にも、「サケをのめして履物みたいのを作った」(老年層・男性)、「家の屋根は茅葺だった」(老年層・女性)、「(アイヌの伝統料理であるとうきびを用いた) 団子は一週間に一回くらい作ってもらっていた」(老年層・女性) というように、アイヌの伝統的な生活様式が経験されていた。

第3項 現在のアイヌ文化の実践と今後

では、現在のアイヌ文化への関わりにはどのようなものがあるのだろうか。おおまかには、アイヌ協会の研修会や行事等への参加により体験・実践されているものと、日常生活の中で実践されて

いるものがあげられる。

現在のアイヌ文化の実践があるとした人々のうち、大半を占めるのが、アイヌ協会の支部で開催されている研修会である。これまでに、刺繍、木彫り、トンコリ、ムックリなどの研修会が開催されており、老年層の18人のうち10人に参加経験があった。壮年層や青年層からは参加経験は語られなかったが参加希望はあった。比較的時間にゆとりがある老年層が参加しているのが現状である。現在、研修に参加している人々のほとんどに今後も参加したいという希望がある。参加の動機としては、「興味があったから」「アイヌ文化にふれたい」「協会のほうから声をかけられたから」などが語られている。また、もともと興味はなかったものの、研修参加により金銭的対価が得られることも参加の直接的な動機になっているケースも見られた。

- ・ トンコリやムックリを習っている時やお盆を彫っている時、着物を縫っている時など、アイヌの文化にふれている時にアイヌであることを意識する。(老年層・女性)
- ・ 刺繍と木彫りは参加したことある。(アイヌ協会の研修会で) 先生が来て教えてくれた。これはちょっと楽しかったな。でも、普段はしないから。でも、興味があったから、これは参加させてもらいました。(壮年層・女性)
- ・ [研修会などがあるときは、なるべく参加するようにされてるんですか?] なるべくじゃない、ずっと参加してます。(老年層・女性)
- ・ [どうして参加したいと思ったんですか?] 受講すれば金くれる。(中略) これ年間4、5万くらいくれるよ。[元々関心があったという訳では?] そんなもの(ない)。(老年層・男性)

次に、研修会参加以外の行事や日常生活の中でのアイヌ文化の実践について見ていく。いずれの年齢層でも語られたのは、イチャルパやカムイノミへの関わりである。青年層の中で唯一、アイヌ文化を現在も実践しているのが、父がアイヌ文化伝承者である女性である。父が祭司を務める際には、「私もメノコっていう役、大事なお酒を注ぐ役」(青年層・女性) が与えられており、アイヌ文化の担い手となっている。

- ・ (父が) 和人なんですけど、(文化) 伝承者になって… (中略) 今はイナウ作ったり、その祭司を務めたり、そういうことをしてるので、家でそういうことはしょっちゅう見たり、アイヌ語を聞いたりします。(青年層・女性)
- ・ もうかれこれ6、7年かな、イチャルパ頼まれて出てから、イチャルパ出てるかな。それこそお酒つぐ役だけど、やってるかな。(壮年層・男性)
- ・ 集まってイチャルパをする。(老年層・男性)

日常の中でアイヌ文化を実践していない場合も、「イチャルパがあった時に祈るくらいで。5月か6月に善光寺に毎年行って手を合わせるくらいで、その他はないわ」(老年層・女性) のように、イチャルパが唯一のアイヌ文化への参加機会になっている。日常生活の中で実践されているアイヌ文化としては、「割とねアイヌ語でしゃべる時があるのさ。アイヌ語でね、私はね」(老年層・女性)、 「(父が) 山に入るとき (中略) キノコ採りとか、山菜採り行くときは、山に酒こうやってあげて、

ごによごによ言ってるのは聞きます。アイヌ語で（中略）いただきますってことだと思う。山の恵みに感謝して、いただきますっていうことを言ってから入るっていう」（青年層・女性）のように、アイヌ語、自然への祈りなどが語られたが、現在あるいは過去、子どもの頃に家族などの身近にアイヌ文化の実践者がいたか（いるか）が、現在の実践に結びついている。しかしながら、その実践を継承していくことには困難がともなう。

- ・ アイヌの女性が編む、ござ編みとかしたり、（アイヌ文化伝承者である父に）「おまえもアイヌ人だし、そういう血も引いてるし、そういう（伝承する）人になんなさい」と言われたんですけど（中略）重荷だなと思うし、何かそこまでして、私がアイヌを引き継がなくてももう現代人だしなと思ってやめました。（青年層・女性）

このように、アイヌ文化を継承していくことは、「重荷」であるし、もう「現代人」である自分が主体的に担っていくということについては、難色が見られる。一方で、アイヌ協会の研修会として提案されるアイヌ文化や、継承することを念頭に置かない趣味的な文化活動については、前向きな語りが多く見られる。

- ・ （アイヌ協会の研修会で）楽器弾くやつやるっちゃうから楽しみにはしてるけど。（壮年層・女性）
- ・ （アイヌ）模様とか結構独特なので、そういうので興味はあります。アイヌ語とかは、中学校ぐらいのときに洞爺湖温泉でペンダントとかを売っている人とかがいたんですけど、そのときにペンダントにアイヌ語を彫ってもらって、願い事が叶うとかいうので、ちょっとだけ触れたことがあるんですけど。それからちょっとだけ興味は。全然意味はわからないんですけど。（壮年層・女性）
- ・ 前にアイヌ語を勉強したいと思って、テキストをもらったけれど、やらないで終わりました。日本全国にアイヌ語の地名などありますけれど、そういうのを覚えていればここがどういう地形だとかが分かると思うので、少しでも覚えてみたいという気持ちはあるんですけどね。（壮年層・男性）

ここからは、エスニック・アイデンティティに関わるアイヌ文化というよりも、趣味的な活動としてのアイヌ文化活動に興味があることがわかる。アイヌとして主体的に受けつぐべきものというよりは、アイヌ文化のさまざまな「メニュー」の中から、自分の日常生活に潤いをもたらすものとして選択する文化として捉えられていることが示唆される。一方で、和人配偶者の中には、具体的なアイヌ文化への関わりの希望と文化活動に関わる明確な意図を有している場合があることが看取できる。

- ・ 陣羽織を縫おうと思って。陣羽織はあんなのは正装じゃないんですけどね、着ること多いので作ろうと思って。（壮年層・女性・和人）
- ・ 着物にする刺し子を以前少し習ったことがあるので、今後やってみたい。（老年層・女性・和人）
- ・ アイヌ民族にすばらしい文化があったことは少しでも知りたい、近づきたいと思った。夫にそ

う言うと、(アイヌの) 夫は「何にも世の中に役立たない」と言っていた。一緒になった夫の文化に十分なことはできないけれど少しでも携わりたと思った。(老年層・女性・和人)

- ・ 僕は最初チセを作った時はこちらに来てすぐだったんですね。建築をやっていたこともあるけれど、あれを作る過程を見た時すごく考えられた構造だと思って(中略) ああいうのを見た時にすごい人たちだと思って、こういうものって風化させずに伝えていくことは大事だなと思いました。(壮年層・男性・和人)

このことから、アイヌの配偶者となり、ほとんど未知の文化であったアイヌ文化にふれることによって、アイヌ文化の実践や継承に関心を持つにいたっていることがわかる。つまり、今後実践したいアイヌ文化が実践されるためには、まずは、アイヌ文化にふれることが重要である。老年層の中には、若い世代に対して意識的に文化にふれさせる試みをしている者も見られる。

- ・ 「お子さんにそういった事を引き継いで貰いたいとか、そういった事で何か教えたりといった事は？」 いやー、強制的に、「そうすれこうすれ」という事は言いたくないから。自然に、自分でやりたければやれば良いと。「こういう文化があるんだよ」というのだけは教えてありますよ。(中略) たとえば刺繍とかね、木彫りとか。そういうものがあって、これがアイヌの伝統的な文化なんだっていう事は教えていますけどね。(中略) この辺でね、アイヌの文化なんかを教えるったら、本当に微々たるもんなんだよね。1 番手っ取り早いのはカムイノミとかイチャルパとか、そういうのなので、教えていくより他ないんです。(カムイノミやイチャルパには) 毎年参加してやってますからね、子どもらにも見に来させてますし。(老年層・男性)

どの世代もふれることができることが、カムイノミやイチャルパの利点である。しかし、そこにはイベントの観客としての立場に終始してしまう可能性が高いという限界もある。一方で、継続的にアイヌ文化にふれることができる機会であるアイヌ協会の研修会への参加者のほとんどは老年層である。アイヌ文化が一部の伝承者のみに経験されるものになりつつある現状において、アイヌ文化を通したエスニック・アイデンティティの醸成は困難になりつつある。

第3節 アイヌ協会への加入と関わりの現状

これまで見てきたように、本調査の対象者のアイヌとしての意識は、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の中では「どちらでもない」という意識を持つ者が圧倒的に多く(83.0%)、アイヌ文化の実践の状況も36.2%にとどまっている。しかしながら、アイヌ協会への加入は全体の80.9%であり、新ひだか(84.2%)とほぼ同程度となっている(表3-6)。年齢層別に見ても、青年層(伊達55.6%、新ひだか66.7%)、壮年層(同80.0%、88.5%)、老年層(同94.4%、86.4%)であり、10ポイント程度の差である。本調査への協力が可能ということ自体、アイヌ協会への関わりがある人々であるという前提があるものの、エスニック・アイデンティティの希薄さとアイヌ文化の実践状況の少なさに鑑みれば、加入率は高いといえる。では、アイヌの人々にとって、アイヌ協会はどのように捉えられ、アイヌとしての意識にどのような影響をもたらしているのだろうか。

表3-6 アイヌ協会への加入

単位:人、%

年齢層	加入している		加入していない		わからない	
青年層 (9人)	5	55.6%	2	22.2%	2	22.2%
壮年層 (20人)	16	80.0%	4	20.0%	0	0.0%
老年層 (18人)	17	94.4%	1	5.6%	0	0.0%
合計 (47人)	38	80.9%	7	14.9%	2	4.3%

まず、協会への加入の動機として、すべての年齢層で語られたのは、教育費（奨学金）の給付貸付や住宅資金の貸与などの制度利用である。一方で老年層のみに語られたものとしては、アイヌ協会の研修会などを通して文化活動に参加する機会が得られやすいことである。前節でふれたように、アイヌ文化活動への参加は、アイヌ文化を楽しみ交流を通して、エスニック・アイデンティティの醸成につながっていることのみならず、金銭面での対価を得られる場にもなっている。

ここでは、年齢層を問わずに協会加入の動機として語られた、教育費の給付貸付や住宅資金の貸与への考え方を通して、人々にとってのアイヌ協会の位置づけやアイヌとしての意識への影響を見ていく。

（教育費の給付貸付）

- ・（子どもの）高校進学を機会に入会した。（青年層・女性）
- ・（教育費の給付で進学した子どもたちに）だから「父親がアイヌだからこうやって援助が貰えるんだよ」という事を言ってます。（壮年層・女性・和人）
- ・（教育費を）孫がもらってるから。あんた、こうやってアイヌのね、何万でももらってやってるでしょ。それだけ、お母さんがラクなんだよっていうことは教えてます。（老年層・女性）
- ・うちの2番目（の子ども）も（大学進学の際に）奨学金で入ったんだけど。非常に助かりました。（老年層・女性）
- ・学費だけまかなって貰っても、それだけでは全然、今のアイヌの多くの家庭では学校に上げられませんので、生活費というものも、生活費っていうか大学の場合ね。（老年層・女性）

（住宅資金貸与）

- ・ウタリ協会に感謝しているのは、住宅支援なんかいろいろなのがあって、それを借り入れてもう25年で完済するの。だから有難かったと思っています。それと高校入学の時も奨学金などもあって、すごく助かったんです。（壮年層・女性）
- ・やっぱりウタリ対策で何かもらえるでしょ、資金が。（壮年層・男性）
- ・住宅資金、（中略）その関係で入ったというのがあったみたいで（中略）（なるべく早く入っておいたほうが）心証が良くなるんじゃないかというような感じで。（壮年層・女性・和人）
- ・（アイヌ協会には）なんかあった時は助けてもらえるからって言われて。実際にうち建てる時は金借りたけど。金借りて自分で建てたから。普通の人の3分の1で建てて。（老年層・男性）

このように、いずれの年齢層もアイヌ協会に加入することで利用しやすくなる教育費や住宅資金の制度についての評価は高い。大学に進学する場合はまったく不足しているという声もあるものの、「やっぱり子どもが高校入ったら奨学金とかも下りるし、良い制度だなと」(青年層・男性)のように、とりわけ青年層は協会加入の動機も時期も子どもの進学時期に合わせた明確なものであり、今は加入していないが、将来的には加入したいという未加入者の協会加入の動機にもなっている。

こういった制度を利用することを通して、「(こうした制度が利用できるのも、アイヌであることは) まんざらいやでないと言っても、アイヌということ自体を隠したいということは、自分が一番恥ずかしいのかな」(壮年層・女性) というように、制度を利用することがアイヌであるという自らのアイデンティティを再考する機会になる者や、「(このような制度は)『一般市民の人には無いよね』って言うから、『それは市役所とか、そういう所でお金借りるしかないんだよ』って。『だからそういうのがあって羨ましいね』って言われた事あるの」(壮年層・女性・和人) というように、アイヌであることが制度利用という、いわば特権を得られる条件であると認識する者もいる。

一方で、「娘は協会には入ってないって。隠しているから。絶対入らない、間違っても入らないって。(中略) 本当は(娘にも入会してもらって) 私も孫たちに利用してもらいたいと思うよ」(壮年層・女性) というように、アイヌであることに否定的な意識を持つ場合や協会に加入することがスティグマになると考える人々は利用できない状況である。

また、協会加入の動機や目的が教育費や住宅資金の制度利用であったとしても、そういった制度利用のみを目的とする人々に対して、「学校終わったらやめる人もいるし、家のお金だってね、無利子で借りて、そういう人方が多いよ。家建てて終わったらね、やめる人が多いの。(中略) そういうのには、ちょっと腹立ったこともあるけどさ。利用するだけ利用して、なんも手伝いも来ないでね」(老年層・女性) といった批判的な声もある。その背景には制度を利用したからには協会の活動をサポートすべきであるという考え方がある。こういった考えを持つ人々がアイヌ協会の支え手となっている。

以上のように、アイヌ協会は人々にとって経済的なメリットを得られる場として捉えられている。しかし、アイヌであることに否定的な意識をもち隠したいと考えている人々にとって、アイヌであることを表面化させてしまう契機になる協会加入は避けられてしまい、経済的なメリットを得る機会を逃してしまうことになっている。また、アイヌであることにに対して否定的ではないにしろ、エスニック・アイデンティティが希薄であった人々にとっては、協会への加入動機が経済的な面でのメリットのみを望んでいる場合でも、制度利用を通して、アイヌである自らのアイデンティティを見つめ直す機会にもなっている。たとえば「(奨学金を利用する) それだけが目的ではないので、自分の先祖を学べることも含めてずっとやめないでいます」(老年層・女性) のように、文化活動に携わることによって意識が変容する者もいる。このような人々に対して働きかけることによって、協会のさまざまな活動へのコミットメントや人々のアイヌとしての意識の形成につなげることができるのではないだろうか。

第4節 アイヌとしてのアイデンティティと今後

本節では、アイヌとしての意識が今後、どのように変容する可能性があるのかを、過去・現在・今後への意識を概観した上で、検討を行っていく。

本調査では、アイヌとしての今後の生活の意識について、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「とくに民族は意識せず生活したい」「その他」の4つの選択肢から最も近いものについて回答を得た。

表3-7では、「アイヌとして積極的に生きていきたい」を「積極的」、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」を「消極的」、「とくに民族は意識せず生活したい」を「どちらでもない」として表記した。

全体の結果としては、「とくに民族は意識せず生活したい」が83.0%で最も多く、次いで「アイヌとして積極的に生きていきたい」が14.9%、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」はいなかった。新ひだかや札幌・むかわ調査に比べ、「積極的」である者は少なく、「どちらでもない」者が多くなっている。一方で「消極的」である者はいない。この結果を現在の意識との対比でまとめたものが表3-8である。

表3-7 アイヌであることに対する今後の意識 単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
伊達	7	14.9%	0	0.00%	39	83.0%	1	2.1%	47	100.0%
新ひだか	21	36.8%	1	1.80%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
札幌・むかわ	67	59.8%	4	3.60%	41	36.6%	—	—	112	100.0%

注) 札幌・むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

表3-8 アイヌであることに対する今後の意識 単位：人

	現在		今後			今後			今後	
	現在	今後	現在	今後		現在	今後		現在	今後
青年層 (9人)	1	積極的	1	0	積極的	0	8	積極的	1	
		消極的	0		消極的	0		消極的	0	
		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	7	
		その他	0		その他	0		その他	0	
壮年層 (20人)	1	積極的	0	1	積極的	0	18	積極的	0	
		消極的	0		消極的	0		消極的	0	
		どちらでもない	1		どちらでもない	1		どちらでもない	18	
		その他	0		その他	0		その他	0	
老年層 (18人)	5	積極的	5	0	積極的	0	13	積極的	0	
		消極的	0		消極的	0		消極的	0	
		どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	12	
		その他	0		その他	0		その他	1	
合計 (47人)	7	積極的	6	1	積極的	0	39	積極的	2	
		消極的	0		消極的	0		消極的	0	
		どちらでもない	1		どちらでもない	1		どちらでもない	36	
		その他	0		その他	0		その他	1	

これまでの結果をふまえ、過去、現在、今後（将来）の時間軸に沿って分類したものが表3-9である。今後の意識として、「否定的／消極的」な意識を有する者はいなかった。以降では、今後の意識として「肯定的／積極的」「どちらでもない／意識しない」それぞれの意識を有している人々の語りを見ていく。

表3-9 アイヌであることに対する過去・現在・今後の意識

単位：人、%

	肯定的／積極的		否定的／消極的		どちらでもない ／意識しない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
過去	6	12.8%	3	8.5%	37	78.7%	-	-	47	100.0%
現在	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	-	-	47	100.0%
今後	7	14.9%	0	0.0%	40	85.1%	1	2.1%	47	100.0%
合計	20	14.2%	5	3.5%	116	82.3%	1	0.7%	141	100.0%

現在、アイヌであることに肯定的な意識を持っている7人のうち、今後も積極的に生きていきたいという者は6人である。札幌・むかわでは、どの世代においても、「肯定的」である人々は、例外なく将来にわたって「肯定的」であり続けることが明らかになっており、新ひだかでは、現在、肯定的な意識を持っている者のうち、今後、積極的に生きていきたいという者は67.8%であったことから、本調査の結果は札幌・むかわ調査に近い。しかし、現在も今後もアイヌであることに肯定的である者は、青年層1人以外は老年層である。今後実践したい文化がある者が全体の46.8%、青年層の55.6%を占めている（本章第2節参照）ことに鑑みると、アイヌとして積極的に生きていきたい人の割合は少ないように思われる。

- ・ もうアイヌ人だということは、もう変えられないし、認めますし、それで何かできるのであれば、やりますという感じですね。（青年層・女性）
- ・ アイヌを誇りに思うね。（中略）自分たちは子どもの時から、親がそうやってアイヌのあれ（文化活動）で一生懸命やってた、それを見てるから。（老年層・女性）
- ・ 民族のいいところだけ、自分に文化を備えていればそれでいいのではないかと思う。文化のいいところを知りたいし、なくしたくないけれど、強制的というのはよくないと思う。自然体でこういう文化もあるんですよというのがいい。（老年層・女性・和人）
- ・ アイヌ民族っていうのは元々北海道の中の民族なんだよね。だからやっぱり縄文時代からこの土地に住んで、その血が繋がって来てるという事は、やっぱりアイヌ民族の誇りだと思うんですよ。（老年層・男性）
- ・ アイヌと知られて生活したほうがいい。何故だかわかる？やはり中国、韓国にわかってもらえないと。今の状況をみたら、俺は日本の教育を受けているけれど大和民族じゃないから、そういう人間もいるんだとわかってもらえないとだめだね。（老年層・男性）

このように、積極的に生きていきたいという人々の意識は、親が行っていたアイヌの文化活動を見聞きしてきたこと（老年層・女性）や、アイヌ文化活動に携わり始めた上で「何かできるのであれば、やります」（青年層・女性）というように、アイヌ文化活動にふれた経験によって醸成されているもの、歴史の中では縄文時代からアイヌ民族が元々北海道の中の民族であったこと（老年層・男性）、海外に視野を向けたときに、日本にはアイヌ民族がいるということを知らしめる必要がある（老年層・男性）といった考えから形成されたものであった。

次に、回答者の85.1%を占める「どちらでもない／意識しない」という意識の人々の内実を見て

いく。全体的には、肯定的でも否定的でもないという意味の「どちらでもない」というよりは、「意識してこなかった」という語が多い。

- ・ とくに意識は、今までもそうだけどそんなに意識はしたことないから、このままでいいかなと。(青年層・男性)
- ・ 今は何もしていないので、とくに民族は意識せず生活したい。何かに携わっていないと(アイヌと)主張しても…。(青年層・男性)
- ・ (自分がアイヌであるということは)全然気にしないけど、でもアイヌのことも知っておきたいなという気持ちはあります(中略)いろんなことを体験したし、させたいです、子どもに。(青年層・男性)
- ・ (子どもにはアイヌであることを)多分伝えないんじゃないですか。[理由はありますか?]---とくにないですね。自分が意識していないから。(青年層・女性)

青年層は、今までにアイヌであることを意識する局面がなかったため、今後も意識しないであろうという状況である。しかし、自らは積極的にはなれないけれども、子どもには「いろんなことを体験させたい」(青年層・男性)という希望を持つ者もいる。そのような体験の機会の有無によって、今後の意識も異なっていると見られる。

- ・ 自分自身がアイヌと言われてもピンとこないから、何であってもいい感じ。(壮年層・女性)
- ・ 自分が「アイヌですよー」とかって積極的に出したい訳でもないし。わからない。そういう事がちょっといまいちピンとこないかな。(壮年層・男性)
- ・ 別に知られて困るわけでないし、私はアイヌです、血が入ってますよって言うこともないし、ただ普通に生活、ですね。(中略)アイヌ民族だからどうのこうのっていうのは、まったく考えたことないです。(壮年層・女性)
- ・ 自分がそんなにそういう民族の家系であるということを意識していないから。(子どもへの告知についても)とくにないんだけど、うちの親とかもそんなにアイヌの血が、ほとんど薄いみたいな感じで言われていたので、とくに告知とかする気はないかな。(壮年層・女性)
- ・ 別にアイヌ民族だからといって恥ずかしがることもないし、恥ずかしいというわけではないのですけども、普通に生活していければ、別にアイヌ民族であるとか和人であるとかというのは関係ないと思うので。(壮年層・女性)

壮年層では、自らがアイヌであるということに「ピンとこない」「まったく考えたことがない」(壮年層・女性／男性)ので、これまで通り普通に生活したいということが、アイヌであることを「意識しない」という意識につながっている。一方で、アイヌの血が薄いことが、アイヌであることについてのアイデンティティを有しないことや子どもへの告知が不要である理由として述べられていた。また、アイヌであることは「恥ずかしがることではない」とも語られていた。しかし、本章第1節でみたように、壮年層はアイヌであることで差別されたり、身体的特徴により嫌な思いをしたりした人々が多く含まれている。にもかかわらず、壮年層のすべての対象者がアイヌであることを

「意識しない」と答えることの意味は、青年層のように「意識したことがない」ということではなく、かつては意識していたものの、「意識しなくなった」あるいは「意識しないようにしたい」という感情に近いのではないだろうか。

- ・ 意識しない。積極的ということはないけど、あんまり積極的になったら子どもらがかわいそうだから。(老年層・男性)
- ・ とくに民族は意識せず生活したい。ずっとそういうふうに来てきたので、今更変えるなんて考えない。(老年層・女性)
- ・ アイヌであることを意識したことはないし、そういうものだと思っているから恨んだこともない。(中略) アイヌだからという理由で利益も不利益もない。(老年層・女性)
- ・ アイヌはアイヌだからね。自分の意識の中だし、まわりの人も知っている人は知っているから、それを前面に私はアイヌというのではなく、アイヌとしてどんなルーツを辿ってきたか、昔のことを少し覚えていこうと。(中略) 子どもは離れているけれど、何かの時にはこういうことだよとちゃんと言ってるし、写真でも見てるし、言わなくてもきっと理解してわかっていると思います。(老年層・女性)

老年層は、子どもの頃からアイヌ文化を身近なところで経験してきた世代である。そのため、アイヌであることに對して積極的な意識を有する人も少なくない。また、アイヌ協会の研修会などに参加し、アイヌ文化に現在も親しんでいる人々が多いのもこの世代である。しかし、自分がアイヌに関する活動を積極的に行うことにより「子どもらがかわいそう」(老年層・男性)というふうを考える者や、「意識しないようにする」という生活が長く続いてきたために、「今更変えるなんて考えない」(老年層・女性)ということであろう。また、アイヌの人々が集住している地域で育った経験があるのもこの世代である。だからこそ「(自分がアイヌであることは) こころの人は皆、わかってると思う」(老年層・男性)ことから、この地域に住み続けるうちは、あえて、アイヌであることを積極的に意識する必要はないということなのであろう。

おわりに

本章では、アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験について、その内実を青年層・壮年層・老年層の年齢軸と、過去・現在・未来の時間軸に沿って検討してきた。本調査では、アイヌとしての意識について肯定的でも否定的でもない「どちらでもない」意識を持つ人々が多いことが特徴であったが、その内実には、アイヌとして肯定的か否定的か、というよりも「意識していない」あるいは「意識する機会がなかった」、もしくは「意識する機会を回避した」という捉え方が的確であると考えられる。全般的にアイヌとしての血筋の薄さがエスニック・アイデンティティを持つ必要性を感じないという人々の根拠になっている。とりわけ青年層については、文化の伝承に携わっている1人を除き、アイヌであることを肯定的にも否定的にも経験する機会がないために、エスニック・アイデンティティを持つにいたっていない。

アイヌ文化活動については、主体性をもって活動する者は札幌・むかわや新ひだかよりも少なく、アイヌ協会の研修会で実施されるものが、伊達において継続的に体験できるアイヌ文化となってい

る。しかしながら、参加者は老年層がほとんどであり、文化の継承という点からみると、研修会は継承の場になり得ていないかもしれない。むしろ、イチャルパやカムイノミ、チセづくりなどに、若い世代がコミットできるような仕掛けがより重要になってくるであろう。

また、アイヌ協会への加入による教育費の給付貸付や住宅資金の貸付は積極的に利用されていた。エスニック・アイデンティティが希薄になっている世代にとっては、アイヌ協会は文化活動の体験というよりは、教育費や住宅資金の便宜を受けることが加入の動機になっている。青年層や壮年層などの子育て世代を惹きつけ、アイヌ文化の活動の担い手を養成していくためには、子育て世代に実際に役立つ経済的なメリットが得られる制度利用は今後も欠かせないものである。一方で、エスニック・アイデンティティとはほとんど切り離された状態でアイヌ協会への加入や制度利用が行なわれ、自らのエスニック・アイデンティティと向き合う経験が提供されないのであれば、アイヌの人々の組織化は困難になり、アイヌ文化が継承される機を逸することになってしまうだろう。

参考文献

- 小内透・長田直美, 2012, 「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 169-81.
- 新藤こずえ, 2013, 「エスニック・アイデンティティの諸相」 小内透編『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 51-67.
- 上山浩次郎, 2012, 「エスニックな社会運動への参加と意識——アイヌ協会がもつ生活上の意味」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 183-93.

(新藤こずえ)